法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-03-14

『日本人の忘れもの』，中西 進著，2001年7月，ウェッジ(本の招待席)

Kaji, Hiroshi / 梶，裕史

(出版者 / Publisher)
法政大学人間環境学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
人間環境論集 / 人間環境論集
(巻 / Volume)
3
(号 / Number)
1
(開始ページ / Start Page)
43
(終了ページ / End Page)
44
(発行年 / Year)
2003-02-28
(URL)
https://doi.org/10.15002/00004488

Hosei University Repository

本の招待席

『日本人の忘れもの』

中西　進 著

(2001年7月　ウェッジ)

本書は、「心の時代」を目標とする21世紀に向けて、日本民族の暮らしの履歴の中から、世界に誇れる「心」や「もの」の伝統について綴った、21の随想を一冊にまとめたものである。

筆者、中西進氏の肩書きを一言でいえば、日中比較文学研究を主業績とした『万葉集』研究の大家ということになろうが、その博捜ぶりは上代日本文学に留まらない。奥書の著者紹介に「日本文化の全体像をおさめた研究・評論活動で知られる」とある通り、専門分野での研究成果を、学際的な視野から広く一般に還元できる貴重な学植の持ちぬしである。

「心」「躰（からだ）」「暮らし」の3章の区分は、凡そ精神・行動・衣食住といった分け方と思ってよいが、あくまで便宜的な章立てであろう。筆者自身、各章が個別と受け取られることは本意ではないはずだ。評者の私見でも、日本人の伝統的な心性では、「こころ」と「もの（＝環境）」と、両者をむすぶ体の動き（行動）は渾然一体のものであり、相互に結びついて心ゆたかな暮らしを育む。

一般によく言われる、「物質的な豊かさから精神的な豊かさへ」などという表現は、あまり適切ではない標語である。その文句の一面的なイメージだけで日本人の伝統を捉えようとすると、誤解を招くことになり、本書も十分に理解することはできない。

筆者は結びに、個々の随想を生かすかたちで4つの提案をしている。「帰属意識を持とう」「本当の大人になろう」「深くいのちを愛そう」「自然を尊重しよう」。―どれも、きわめてシンプルな内容である。それだけ見れば、目新しい輝きはなかろう。

前の二つは、私流に言い換えれば「対人関係」尊重の心がけのことである。人間関係あっての自分、という生き方のこと。これが社会を賢く機能させ、貴い人間性を培ったきた。後の二つは、文字通り、エコロジーへの適性豊かであった伝統的な心性を生かそうというもの。この二つの心がけが、心の豊かさをもたらし、ひいては、サスティナブルな社会につながっていく。―私たちの学部のコンテキストで読み換えるとすれば、このようにまとめることも可能だろう。

繰り返すが、きわめて易しい言葉で、誰しもに自明のこと語っているともいえるわけで、斬新さには乏しいかもしれない。また当然、法律や経済といった実学の分野からの、プラグマティックな施策の提言でもない。しかし、「ただのきれいごとではないか」といった読後感に終らないのは、私たち日本人は、確かにそう遠くない昔まで、美しいものを持っていたのだ、というささやかなアイデンティティー発見の喜びを、個々の随想を通じて感じることができるからではないか。それは、「環境の世紀」に望ましい適性を、民族の資質として持っているのだという自信のような手応えを心に温める。

「忘れ物」というタイトルに留意されたい。本書に書かれていることは、日本人が完全に喪失してしまったものではなく、「忘れ物」だということ。おそらくささやかな工夫や努力によって、見直して取り戻すことも可能なのである。そういう筆者の願いを汲み取ることが、いちばん大切なことだろう。

専門的には、「結論」が決して目新しくなくても、今も暮らしに生きる「ことば」を足がかりにした随想集であることに注目してほしいと思う。各章の一つ一つの項に、やさしいやまと言葉のタイトルがついている。それぞれの言葉には、当然、背後に長い生活の重みがある。たった一つの言葉から、その語源や、それにまつわる暮らしなど、多くのことを探れる。ことばは、それが残っていれば、たとえモノが消えてしまっても、映像記録がない時代の暮らしや心を復原し得る貴重な「文化財」である。かつ、今も現役で使われ、将来にも受け継いでいくことができるものである。それは、民族共有の不滅の魂に等しい。

昔ながらの、エコロジーに叶った暮らしが、やがては民俗資料館のような所でしか見られなく

Hosei University Repository

なったとしても、私たちが日本語を愛して大切に使い続けるかぎり、日本人の良き伝統は、かたちを変えて継承していくことができるだろう。

—筆者はこんなことまでは言っていないが、こうして「やまとことば」を中心とした随想であることが、やはり文学研究者の手による日本人論の個性であると思われる。

全章、平易に綴られていて、時には簡潔すぎて、かえってもう少し専門的な説明を補ったほうが分り易いと思うところもあるくらいである。また、ところによっては、少々抽象的、私的な思索に傾いていて、具体的な語源解説などに代えたほうが一般にはありがたかろう、と思う箇所などもある。しかしこれらは、原稿初出の雑誌の連載の性格や制約によるもので、筆者の手落ちではない。

本書は、書店で「日本語」関係の書棚に置かれても不適切ではなく、このような一般向けの「日本語」随想は、今までも珍しくない。しかし、21世紀の世界的課題、広義の「環境問題」を意識して書かれた日本語論系統の著作は、まだ少ないといえる。

その意味で本書は—本格的な専門書ではないが—、本学部で学習する諸君が、一見、環境問題の勉強とは縁遠くみえるであろう、人文科学系からのアプローチの意義を知るうえで有益である。サスティナブルな社会を目指すうえで、何がいちばん大切なのか。そういうことを考える契機になる。

手っとり早い「答え」は、本書のなかにはない。あくまで、私たち日本人の資質を見直す良いきっかけ、道しるべになるであろう随想である。

（人間環境学部専任講師　　梶　裕史）